

京都市立芸術大学大学院音楽研究科博士(後期)課程学位申請リサイタル

# *Baritone Recital*

高橋 純

ピアノ 樋上 眞生

2017 11.28 (火) 19:00 開演 18:30 開場

場所 京都市立芸術大学 講堂

## ご挨拶

博士課程における主な研究課題として「ベル・カント」に注目し、声楽実技においては、その技術の習得を目指し、論文研究では科学的アプローチによってその実態を明らかにしようと試みてきました。

声楽実技においては小濱妙美教授の指導のもと、発声における「響きの統一」を第一目標とし、様々なテキストを用いて訓練を行いました。一年目のリサイタルでは、発声の基礎に立ち返るべく、「イタリア歌曲の変遷」という主題で、イタリア古典歌曲、ドニゼッティ、ヴェルディ、そしてイタリア古典様式をモチーフにしたレスピーギの歌曲に取り組みました。また、二年目はそれらを母国語によって実現するために日本歌曲に取り組み、その対比としてトスティの歌曲、またベルカントオペラの変遷をたどるために、ドニゼッティ、ベッリーニ、ヴェルディのオペラアリアに取り組み、実技研究の目的と方向性を明らかにしてきました。

そして、三年目にあたる今回のリサイタルでは、ロマン派から近代を中心としたイタリア声楽曲の変遷をたどるために、歌曲ではドナウディ、トスティ、レスピーギを、オペラでは、ドニゼッティ、ジョルダノー、プッチーニの作品に焦点を当てました。今回の曲目の並びは単なる年代の序列ではなく、イタリア声楽曲における様式の移り変わりを示す目的があります。まず、ドナウディの古典様式を基とした作品から、トスティのロマン派から近代にかけての歌曲の変遷をたどり、オペラでは、ドニゼッティのベルカントオペラと、ジョルダノーのヴェリズモオペラを対比し、イタリアの伝統に基づいたプッチーニのオペラ様式を提示します。そして、それらすべてのイタリア声楽曲の要素が集約されているレスピーギの作品に取り組みることにより、博士課程の声楽実技における研究の締め括りとしていたと思います。

今回のプログラムにおいて、イタリア声楽曲の変遷をたどりますが、その目的は発声や歌声を、様式や時代に合わせて変えるということではありません。むしろ、それらすべてを同じ発声、歌声で表現するということを目指しています。音楽学者や歌手によって見解が分かれるかもしれませんが、「ベル・カント」というものを、ある特定の時代の装飾歌唱のことだけを指すのではなく、イタリアにおいて伝統的に培われてきた発声技術として考えるならば、全ての年代や様式に共通する理想的な歌声や、発声法を「ベル・カント」と呼んでも良いのではないかと考えています。

その理想的な歌声や発声に共通するものが何なのかを追求するために、論文研究においては、科学的なアプローチとして、歌声の音声分析を行い、「歌い手のフォルマント(Singer's formant)」という歌声の音響的特徴に注目しました。「歌い手のフォルマント」とは、オーケストラなどの楽音には無い周波数群のピークであり、人間の聴覚の最も可聴しやすい3kHz付近にフォルマントが集約されているもので、歌声の「響き」や「豊かさ」などの聴覚印象に寄与します。今回の研究により、2音間における「歌い手のフォルマント」は変化しないほうが聞き手に良い聴覚印象を与え、高い評価を得るということが分かりました。もちろんこれは限られた条件と規模による結果ですが、少なくとも「歌い手のフォルマント」が、理想的な発声や歌声の実現に大きく関わっていることは伺えます。また、声楽実技の第一目標としてきた「響きの統一」という部分においても、この「歌い手のフォルマント」の変化の少なさが、重要な役割を担っていると考えています。

このように、博士課程の研究において「ベル・カント」とは何かという問いかけに対して、その一端を見ることができましたが、その全貌を明らかにすることは容易ではなく、これからの課題とし、自身の演奏や研究を通して、さらに探求していきたいと思えます。

最後になりましたが、小濱妙美教授、津崎実教授をはじめ、ご指導いただいております先生方、リサイタルを開催するにあたりご尽力いただいた方々、全ての皆様に、心よりお礼申し上げます。

高橋純

## プログラム

### S.Donaudy

雲雀のように  
私の苦しみを和らげておくれ  
草の間で  
そしてフィッリは私に言った  
私を見つめないでおくれ  
いつまた君に逢えるだろうか

Come l'allodoletta  
Date abbiento al mio dolore  
Se tra l'erba  
E Filli m'ha detto  
No, non mi guardate  
Quando ti rivedrò

### F.P.Tosti

Plenilunio 「満月」

- 1.八月の満月に眠る
- 2.あなたの細く白い手を望む
- 3.いつも見てください、恍惚とした魂とともに
- 4.自由な空、甘い夢

Nel plenilunio D'agosto dormono  
Vorrei la bianca mano diafana  
Guardarti sempre. Rapita l'anima  
All'aria libera dolce e sognar

哀れな母

Povera mamma!

## 休憩 15分

### G.Donizetti

オペラ「ドン・セバスティアン」より  
リスボンよ、ついに私はお前を見た

O Lisbona alfin ti miro

### U.Giordano

オペラ「アンドレア・シェニエ」より  
祖国の敵

Nemico della patria

### G.Puccini

オペラ「エドガル」より  
この愛は僕の恥

Questo amor

### O.Respighi

夕暮れ

Il Tramonto

## S.ドナウディ(Stefano Donaudy 1879-1925)

イタリアのシチリア島にあるパルレモに生まれ、1896年にパルレモ音楽院に入学した。在学中は、著名な指揮者、作曲家であったG.Zuelliに和声法、対位法、作曲を学び、主にバロック、古典時代のオペラ作曲法を研究した。ドナウディの作品は、今回取り上げた曲目を含む歌曲集「36 Aria di antico (古典様式による36のアリア)」が最も有名であり、現在も演奏されている。彼自身はオペラ作品を全く書かなかったトスティとは対照的に、聴衆に極めて人気のあった著名なオペラ作曲家であったことは、ほとんど知られていない。彼は生涯で6つのオペラ作品を残しており、最初の2作品は私的な演奏会でのピアノ伴奏によるものであったが、3作目にあたる「Teodor Körner(1902)」はハンブルク市立劇場において初演され大成功を収めている。しかし、彼の作品は聴衆の絶賛を得ながらも、当時の批評家からは厳しい評価を得た。今日、彼のオペラ作品が知られていない原因はこれらの酷評と彼の早生である。また、大成功を収めた3作目以降の台本作家に兄のAlbert Donaudyの名があり、「36 Aria di antico (古典様式による36のアリア)」の作詞は全てこのAlbert Donaudyによるものである。

イタリア近代歌曲においては、トスティがその枠組みをつくり出し、優美な旋律を伝統的なベル・カントで歌い上げるとされているが、その甘美なメロディーとは対照的に、ドナウディの歌曲は、古典様式の中にその起源を見出した。それらは「イタリア古典歌曲」として、パリゾッティ(Alessandro Parisotti 1853-1913)が編曲し残したものとは異なり、古典的様式をまもりながらも、新しい独自の音楽を模索したのである。おそらく、それは彼が学んだバロックや古典時代のオペラ作曲法によって培われたものであったに違いない。ドナウディは36の歌曲それぞれの題名とともに、15～17世紀のイタリア世俗音楽の楽種名(Aria Arietta Ballatella Canzone Frottola Madrigale Maggiolata Villanellaなど)を付記しており、すべての楽曲に、基とした古典様式を示している。また、ドナウディは、バロックや古典時代のオペラアリアにおいて、歌手に任されていた記譜されていない装飾音を、歌曲において全て記譜し、また多様な強弱、速度変化の指示、曲想の変化を示す発想標語が細やかに用いられている。その多様な発想標語はトスティの約3倍も列記されており、ドナウディが、自身の歌曲における演奏の解釈を監督し、その作風や独自の音楽を正確に示そうとする意図が見て取れる。

## F.P.トスティ(Francesco Paolo Tosti 1846-1916)

イタリアのアブルッツォ州キエーティ県オルトーナ生まれ。1858年ナポリ音楽院に入学し、ヴァイオリンと作曲を学ぶ。特に、ヴァイオリンは幼い頃から才能を発揮し、1866年にディプロマを取得した。イタリアにおける近代歌曲の地位を確立した作曲家の一人である。当時のイタリアではオペラが全盛期であり、多くの作曲家がそのジャンルにおいて作品を競う中、彼はオペラに向かわずに歌曲に徹した。それまでイタリアで歌曲といえば民謡(カンツォーネ)が主流であり、有名なオペラ作曲家たちもサロン風歌曲を書いているが、それらの多くはポピュラー性の強い民謡調のものか、あるいは劇的なオペラ書法の延長上に書かれたものであった。しかし、トスティの歌曲はそれらとは一線を画しており、母国語のイタリア語だけではなく、英語やフランス語を原詩とする作品も多く残している。今回取り上げたPlenilunioとPovera mamma!は、1882年の同年に作曲された作品であり、トスティの作品の中では、今日の演奏会ではあまり耳にしない曲であるが、その旋律美と繊細な和音進行、そして歌詞の語感を生かしたメロディはトスティ特有の様式は、長い間、芸術的主張を持たない価値の低いジャンルとして見なされていたイタリア歌曲の分野を、芸術歌曲の水準にまで引き上げた。

またトスティは、1860年に最初のロマンザ(感傷的な声楽曲)である「お祝い」L'Augurioを作曲して以来、生涯に350曲以上のロマンザを残しているが、Plenilunioの詩を書いたカルメロ・エッリーコは、トスティの有名なロマンザの歌詞を数多く書いた作家である。

## G.ドニゼッティ(Gaetano Donizetti 1797-1848)

イタリアのベルガモに生まれ、1815年にボローニャ音楽院に入学。ロッシーニ(1792-1868)やベッリーニ(1801-1835)と共に、19世紀前半のイタリアオペラを支え、その地位を確立した。特に、ベッリーニとドニゼッティは同時期に活躍したオペラ作曲家としてよく比較されるが、ベッリーニは短命で36歳で世を去ったこともあり10作品のオペラしか残さなかったが、ドニゼッティは、51歳で亡くなるまでに78作品のオペラを残している。今回取り上げた「ドン・セバスティアーノ」は、晩年の作品にあたり、彼が亡くなる5年前の1843年に作曲されたものである。ベッリーニの抒情的で劇的な音楽に対して、ドニゼッティは、一般的に馴染みやすく耳あたりの良い甘美な旋律を用いており、それゆえに沢山の作品が聴衆に受け入れられている。

また、ロッシーニ・ベッリーニ・ドニゼッティの作曲したオペラは、ベル・カントオペラと呼ばれ、イタリアの伝統的発声法、あるいはその音楽様式を用いて歌うべき作品であるとされている。ベル・カントとは、歴史的な解釈をするならば17世紀以降にオペラの中で用いられたA-B-A形式のダ・カーポアリアなどの装飾的歌唱法を示す言葉であり、ドニゼッティの作品の中にも、各所にその装飾部が存在する。その部分をどう歌うかは歌手に任せられ、その装飾部における歌唱の技術を競う中で、より優れたものがベル・カントと呼ばれた。

## U.ジョルダノ(Umberto Giordano 1867-1948)

南イタリアのフォッジャに生まれ、1880年にナポリ音楽院に入学する。マスカーニ(1863-1945)のカヴァレリア・ルスティカーナを皮切りに到来したヴェリズモオペラの時代に、レオンカヴァッロ(1857-1919)、そしてプッチーニとともに活躍した作曲家である。今回取り上げた「アンドレア・シェニエ」は、彼の作品のなかでもっとも成功した作品である。頻繁な転調を繰り返し、劇的で激しいオーケストラを伴った音楽は、イタリアのヴェリズモオペラを代表する作品との一つとして、現在も多く上演されている。ジョルダノは、アンドレア・シェニエで成功を収めるまでに、いくつかの作品を書いているが、その中にはロマン派的な様式を模索した作品もあり、その一旦はアンドレア・シェニエの楽曲において、時折垣間見える甘美な旋律の中に見ることができる。

## G.プッチーニ(Giacomo Puccini 1858-1924)

イタリアのトスカナ地方にあるルッカで、18世紀から続く宗教音楽家の5代目として生まれる。1880年にミラノ音楽院に入学し、作曲を学んだ。プッチーニは、ロマン派のイタリアオペラの頂点を築いたヴェルディ(1813-1901)の跡を継ぎ、19世紀末から20世紀初頭におけるイタリアオペラの代表者である。ヴェルディの後、イタリアではヴェリズモ・オペラ(現実主義オペラ)が目立つようになり、マスカーニ(1863-1945)の「カヴァレリア・ルスティカーナ」やレオンカヴァッロ(1857-1919)の「道化師」などが作られた。これらの作品の音楽的手法は、自然な舞台の流れや劇的効果を狙い、歌手による激しいフレーズや大音量のオーケストラを伴った表現方法であったが、長編オペラには不適であり、どちらも1幕の形態で作られた。そのような中にプッチーニが登場したのである。プッチーニは少年期からヴェルディの作品に興味を示し、頻繁にその作品を見に出かけていたことから、音楽においてヴェルディの影響を多く受けていた。今回取り上げたオペラ「エドガル」は、プッチーニの2作目のオペラにあたり、リコルディ社と最初に契約した作品である。しかし、この作品は当初大失敗に終わり、その後何度も改訂を繰り返し現在のものになっている。プッチーニの音楽は、ヴェリズモオペラの流れを受けながらも、ヴェルディから引き継いだイタリアオペラの様式感というものが存在する。特に「エドガル」のように、ヴェリズモの影響を受け始めた「トスカ」より前に作られた作品では、劇的で激しいオーケストラで表現されながらも、歌手に求められるフレーズや声は、ベルカントオペラに求められるものと共通する部分が多くある。

## O.レスピーギ(Ottorino Respighi 1879-1936)

イタリアのボローニャに生まれ、1899年にボローニャ高等音楽学校に入学する。1899年にヴァイオリン演奏でディプロマを取得し、ロシアの劇場管弦楽団の首席ヴィオラ奏者として、イタリア・オペラの上演に携わっていた。しかし、のちにボローニャに戻り、作曲で2つ目のディプロマを取得し、作曲家として活躍する。レスピーギは、歌劇、管弦楽、合唱曲、歌曲など、様々な分野で成功を収めたが、彼の作品の傾向の一つとして、ヴェリズモからの離反があった。そして、現代的な音楽文化を成立させ、イタリア近代の音楽を牽引する作曲家となる一方で、イタリアの古典音楽や教会旋法に対して興味を持ち、熱心な研究と調査を行った。イタリア古楽の復興のために古典様式と近代の和声法を融合し、新たな作品を作り出したのである。

レスピーギは、トスティの影響を感じさせるロマンザをいくつも作曲しているが、彼の作品の中で最も才能を発揮したものはリリカ(叙情歌)と呼ばれる歌曲であり、詩と音楽の結合という考えのもと、旋律を歌い流すだけではなく、「朗唱」を重視した。また、彼の声楽曲の多くは、特定の歌い手に捧げられたものであり、そのほとんどがメゾソプラノに向けたものであった。今回取り上げた「Il Tramonto」は、メゾソプラノと弦楽四重奏のために作られた作品であり、その音楽は、オペラにおけるレチタティーボのような「朗唱」や、重厚で多彩なオーケストレーションから、歌曲というよりはむしろオペラの一場面に近い表現で描かれている。

## 訳詞

### 雲雀のように

野を行く雲雀のように、愛だけが統べる優しい心から、平和と明るさが消え失せる。  
愛だけが統べる優しい心には、どんな喜びもどんな快さも残らない。  
苦しみを感じる魂は、花のように凍っている。

### 私の苦しみを和らげておくれ

尊大な愛しい瞳よ、お前の眼差しが私の心に、甘い苦しみを作り出したのだから、どうかその苦しみを和らげておくれ。  
愛の苦しみに対して、優しい眼差しを惜しむことが、どんなことなのか。  
いとしい瞳よ、お前は知っている。

### 草の間で

新しい小川が草の間で踊って  
海の方へ流れていきながら  
牧場をふたたび緑にするなら、  
春が帰ってくる・・・  
君が僕の胸に寄り添って  
緑に色づくのを行く時、  
優しい西風が  
流れる君の捲きげに戯れる。  
その時、僕の人生は素晴らしい。  
しかし、全てが色褪せて  
地平が暗くなり  
谷間に雨が降り山に雪が轟くなら、  
悲しい冬がまた帰ってくる・・・  
僕は独り。すべての歌と  
君の聖なる唇の口づけが  
十二月の霧とともに  
儚く消えて行く。  
その時僕の人生は悲しい。

### そしてフィッリは私に言った

そしてフィッリは私に言った。  
「お起ちになって、恋する人たち、  
魔法は解けたわ、  
もう愛の支配は終わったわ。」  
だが私は、喘ぎ震えるフィッリを  
しっかりと胸に抱きしめていた。  
すると彼女は私に言った。  
「愛は拍車うや兜を決して失うことの無い  
射手なんだわ。」

### 私を見つめないでおくれ

燃えるようなその目で、私を見つめないでおくれ。  
それをやめてくれないと、私がどんな火で燃え上がるか分からないし、もはや救いもなく、平和もなくなってしまうから。  
ところで、貴女が五月に薔薇とともに生まれ、太陽から一条の光を奪い、他の素晴らしいものは全て身を潜めてしまったというのは本当なのだろうか。貴女には愛の真心というものが無いために、女が誰でも心を持っている所に、戯れしか持っていないというのは本当なのだろうか。

### いつまた君に逢えるだろうか

いつまた君に逢えるだろうか、僕にはあれほど大切だった不実な恋人よ。  
他の男が私たちを引き裂き、私の人生のすべての喜びが永久に消え失せたかと思われる今、私は多くの涙を流した。  
しかし、絶望すればするほど、また希望を抱くようになる。頭の中で君を憎めば憎むほど、私の心はまた君を愛するようになる。  
いつまた君に逢えるだろうか、僕にはあれほど大切だった不実な恋人よ。

### 『満月』

#### 八月の満月に眠る

海岸に散りばめられた白い家々は  
8月の満月に眠っている。  
アドリア海の水は眠り、  
明るい輝きを放つ：  
真夏の夜の魅力の中で、  
自由の空は夢のように甘い。  
そして、月の薄明かりの中で  
夢は私の心から遠くへと渡ってゆく。  
無限に広がる沈黙の中を通過してゆき、  
私が涙し、呼び求めるあなたのもとに：  
私の悲しみの声が届かないところでは、  
私の悲しい夢は嘆かわしい。  
私の夢が来る。  
私は飛んで行きたい。  
ささやきに満ちたあなたの跡に、神秘の方へ。  
静けさに満ちた魅惑の中へ、  
あなたの跡に向かって私は飛んで行きたい。  
私は想いとなって飛んで行きたい。  
疲れ休んでいるあなたのそばへ。

### あなたの細く白い手を望む

あなたの細く白い手を私の顔の上に感じ、髪の中を軽やかに通り抜けるのを感じたい。

あなたの大きな目を見つめたい：

あなたの美しい瞳を長く見つめて、

すべての悩みを忘れるのだ。

### いつも見てください恍惚とした魂と共に

いつも見てください。恍惚とした魂と共に。

波の中であなたの柔らかい声に惑わされ、

あなたの胸の上で瞳を閉じ、

あなたと共に青い海を泳ぐ：

未だ見ぬ海岸を求めて泳ぎ、

空と海の間の人々から、遠く離れて。

空と海の間で、私自身を感じ、

あなたの腕で囲まれた純潔な円の中で、

か弱い妖精よ、

ただ一度私を感じ包み込んで欲しい。

あなたの甘い息吹を吹き込んでください。

唯一私が望んでいるあなたの口に、おののきながら口づけを望む。

### 自由な空、甘い夢

海岸に散りばめられた白い家々は

8月の満月に眠っている。

アドリア海の水は眠り、

明るい輝きを放つ：

真夏の夜の魅力の中で、

自由の空は夢のように甘い。

### 哀れな母

私は墓地にいます！

私の神よ、どれほどの十字架を！

どのような記憶、涙、沈黙、そして忘却を。

この杉の木の棺で、私の赤ん坊は眠っている。

ああ、誰か私にあなたの愛撫や口づけを返して。

あなたに会えない。決してあなたに会えない。

私は決してあなたを見ないだろう、あなたをもう一度見ることはできない！

ああ、もし私が天国を信じないならば・・・

風が吹くと消えてしまうような弱々しい炎、

最後は、お母さんと呼ぶ間に消えてしまった。

死は、あなたの優しい微笑みをなくし、

そして間もなくしてあなたを天国へと送った。

あなたに会えない。決してあなたに会えない。

私は決してあなたを見ないだろう、あなたをもう一度見ることはできない！

オペラ「ドン・セバスティアン」より

**おお、リスボンよ、ついに私はお前を見たのだ。**

惨めな運命に弄ばれた哀れなコモエンスよ。

平地の上の城塞で、残酷な奴隷となった後に、死んで捨てられた。

ついにお前の足枷は壊されたのだ。

にもかかわらず、本当にこの空は、哀れを催させる再会を許された祖国の地であるのだろうか？

おお、リスボンよ、ついに私はお前を見たのだ。

お前のために最後に祖国に戻るのだ。

お前のそよ風が吹くのを感じ、新しい生命を呼びさます。

苦しむことを運命づけられた戦争の、荒々しい喘ぎを忘れるのだ。

おまえは今、死んだ空を、神聖な大地へともう一度見させるのだ。

けれども、国の敵の中にあり、弱まりつつ希望も憐れみもない。

囚われた私の心の愛しい祖国はいつもお前と共にいる。

オペラ「アンドレア・シェニエ」より

### 祖国の敵

祖国の敵だと？！

それは古びた作り話だが、好まれるのだ

なおも酔いしれた民衆に

コンスタンティノーブル生まれ？外国人か！

サンシールで学ぶ？兵士だな！

裏切り者！デューリエの共犯だ！

詩人？破壊者だ 人心と

そして秩序の！

あの頃は楽しかった

憎悪と復讐の間にあっても

純粋で 無邪気で そして強かった

自分は偉大だと信じていたのだから…

だがいまだに召使いのままではないか！

仕える主人を変えただけだ

今は暴力的な情熱の従順なしもべだ！

ああ もっと酷いぞ！殺しては震え

そして殺しながら俺は涙するのだ！

俺は革命の申し子となって

最初にそいつの産声を聞いた  
この世に響き渡る　そしてその声に自分の叫びを  
重ねた…今俺は信仰を失ってしまっているのか  
この夢見ていた運命に対して？  
何という栄光に輝いていたことか  
俺の歩んだ道は！  
心の中の良心を  
人々に呼び覚まし  
集めるのだと　涙を  
敗者の苦しみに対して  
この世界をパンテオンにして  
人々を神々しい者へと変えるのだと  
そして一度のくちづけで  
一度のくちづけと抱擁だけで  
万人を愛し合わせるのだと！…

オペラ「エドガル」より

### この愛は僕の恥

この愛は僕の恥、僕を傷つける。  
僕は忘れたい。でも、恐ろしいほどの魅力なのだ  
僕の心は虜になる。彼女から逃れると何千回も誓っ  
た。  
そして彼女のところに戻り、彼女は私の涙を笑う  
僕の怒りを嘲り、胸がつぶれるような思いだ。  
彼女の足元にひざまづき、彼女を夢見て彼女だけ  
を望む。  
ああ、不幸な！彼女を愛しているのだ！

### 夕暮れ

かつていた、あの人の中の優しい心。  
(それは燃える真昼の青空に消える、薄い雲の中の、  
光と風のような)死と人が対立する。  
(不安を覚える真夏の風の夢のように。)  
ああ、彼の息を止める誰も知らないその甘い喜び  
愛するものと混じり合い、二つの愛し合う存在に  
とっての、初めて知り得た解放と調和。  
彼は、畑へ続く道を歩いた。  
東には木々が茂っていた。しかし、西側は空に向  
かって開いていた。  
今、太陽は水に沈ずむ。しかし、黄金の地平線の上  
に、灰色の雲が覆いかぶさっている。  
平らな草原の上に、花々は揺れている。  
そして、古いタンポポの白い髭の上に、黒い森が  
覆い、夕暮れに薄明かりが混ざる。  
赤く熱された月が、暗い樹木の深い枝々の間から、  
ゆっくりと東へ上がる。  
切ない星星が、頭上に輝いている。

そして、若者は呟く「不思議かい？僕は、太陽が  
上がるところを一度も見たことがない。イザベッ  
ラ、明日一緒に見に行こう。」

そして、若者と女は、甘い愛の夢の夜を過ごした  
しかし、朝になると、彼女は愛するものが、冷た  
くなって死んでいるのを見つけた。

おお！震えるほどの不幸に、慈悲深い神の存在を  
も、信じることができない。

女は死ぬこともなく、取り乱すこともなかった。  
一年また一年と生き続けたのだ。

しかし、私は思う。

彼女の平安な忍耐と、悲しげな笑顔、死ぬことな  
く生き続けたことは、彼女の年老いた父親の為だっ  
た。

(もし、狂気の状態であったならば)それは違った世  
界であった。

狂気であれば、そのように見えなかったであろう  
このように、苦しみ考え、氷のような心に固執し、  
こだわって飾り立てた詩を読むことはなかっただ  
ろう。

彼女の黒い瞳は、光り輝くことはなく、涙によっ  
てまつ毛は磨り減ったようであった。

彼女の唇と頬は、死んだように真っ白であった。  
彼女のほっそりとした手の、はっきりとしない静  
脈は、現れた赤い暁の光に透き通っていた。

むき出しの墓は、昼も夜も、あなたの肉体に閉じ  
込められ、多くの苦しみの影が住みとどまってい  
た。それは失った愛しい人であった

現世において、罪がなく苦悩がない、平安と静寂  
は、継承することができない。

死んだならば再び出会うことができる。

(決して眠ることはない。)しかし、休息するの  
だ。

満たされたように平然と。つまり生きてゆくのだ。  
深い海の中の愛のように。

おお！私の思い出は、あなたにとっての安らぎ。  
これが、彼女の唇によって歌われた唯一の嘆きで  
あった。